学校と地域が理念を共有する学校づくりを目指して
―学校職員と地域の意識改善につながる教育活動の評価の在り方―

舘岡　信也（平成29年度学校経営コース修了）

1　はじめに

本研究は、以下の二点に対する具体的な方策になりうると考え、取り組んだ研究である。

・社会に開かれた教育課程
・新潟県学校教育の重点「地域の特色を生かし、地域とともに歩む学校づくり」

見附市では、学校、家庭、地域が一体となった総掛かりの人材育成を目指す「共創郷育」を推進している。その「共創郷育」を受けて、見附小学校の職員は、ふるさと見附を愛する子どもを育むために、「地域に学び、地域でつながり、地域を創る学習」の実践を積み重ねてきた。また、当校は、平成24年度からコミュニティスクールを導入し、学校運営協議会や学校支援地域本部を通して、地域との連携強化にも取り組んできた。その成果として、地域課題の解決を通して子どもの成長を育んだ総合的な学習の実践が、平成28年度日教弘教育賞最優秀賞として認められた。このように、教育活動において、地域との好循環を生み出しやすい環境でもある。

見附小学校では、「共創郷育」のもと、地域連携強化をグランドデザインの軸に据えている。地域と連携した多様な活動の展開により、学校評価においても「見附が好き」の肯定的評価の数値も上がってきている。しかし、本論で述べる地域と連携した活動の観察の結果では、子どもが地域に対して、「地域のよさを多くの人に発信したい。」「自分のアイデアを地域に提案したい。」「地域のためにできることをやってみたい。」と主体的に関わろうとする姿に大きな差が見られた。

それは、職員が、地域の課題に目を向けたり、活動のねらいを地域と共有したりすることが弱いまま活動を進めたことが原因の一つであると考えた。また、地域と連携した活動を通して、「地域の役に立ちたい。」という地域への所属感に支えられた、地域に対する愛着を育むまでに至らなかったとも考えた。

学力向上、生徒指導、体力向上、特別支援教育といった見附小学校の学校課題に対して、各主任を中心に組織的に取り組み、数値目標に対する成果が上がってきている。しかし、平成25～28年度の全国学力・学習状況調査や見附市共通児童アンケートの自己肯定感や自己有用感、将来の夢や希望に関する項目で、肯定的な評価が全国平均や県平均、市内平均よりも下回っていた。これらの結果から、職員が、各課題の解決に取り組み、数値目標に対する成果を上げてきたことが、子どもの生きる力に必要な資質・能力の育みにつながっていないことが見えてきた。

このような、職員の取組の数値としての成果と、子どもの生きる力に必要な資質・能力の育みとしての成果のずれは、学校と地域が理念を十分に共有せず、教育活動を推進していることが原因であると考えた。そのずれのために、職員は子どもの成長を実感することができず、「やらされ感」が増し、多忙感につながっているのではないかとも考えた。

この課題を解決するために、主題を「学校と地域が理念を共有する学校づくりを目指して」と設定し、2年間の研究に取り組んだ。

2　学校評価会議改善の提案・実施
（平成28年度1月～3月実践）

(1) 理念の共有を図る学校評価会議の提案

これまでの学校評価会議（図1）では、職員の学校評価の内容で、最も改善を要する内容を三つの部会に分けて検討していた。このシステムの課題は、運営面が検討の中心となり、子どもの成長を観点とした検討になりにくいことと、グランドデザインの評価とのつながりが弱いことである。この学校評価会議と同じ時期に学校運営協議会や、学校支援地域本部が開催されている。内容は、前期、後期の児童と保護者による学校評価の内容の検討である。学校評価会議の課題解決に向けて、地域代表がもつ地域の人的資源や物的資源を反映させることで、教育活動の改善が推進できる。

そこで、「理念の共有を図る学校評価会議」(図 1)を主幹教諭と教務主任に提案した。

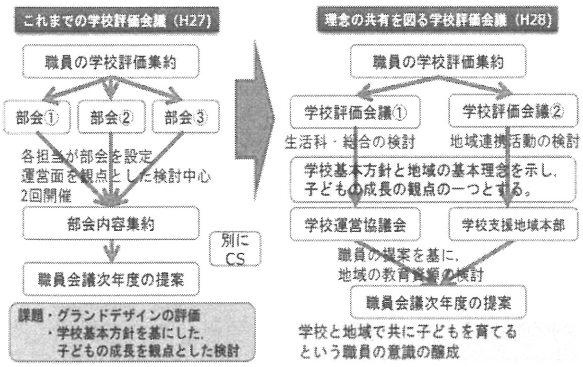


図 1　コミュニティスクールを活用した学校評価会議

学校評価会議の内容を地域連携とかかわりの強い、生活科・総合を中心とした学校評価会議①と、地域連携活動を中心とした学校評価会議②を設定する。職員が全員参加し、グループでのファシリテーション形式で行う。その際、学校基本方針と地域の基本理念を示し、子どもの成長を観点の一つとして検討できるようにする。

その後、学校評価会議で集約した意見を、学校運営協議会や地域支援本部で検討することで、これまで以上に具体的に焦点付けた内容に改善することができると考えた。

(2) 学校評価会議の実際

実際の検討時間は 20 分であった。事前に付箋に意見を書いていたため、年齢や立場に左右されず、多くの意見が出された(写真 1)。評価の観点とつながりが弱いところが明らかになり、次年度の改善策について考える姿が見られた。また、これまでの活動を評価の観点とつなぐことで、どのような価値があるのかを具体的に捉える職員もいた。事後の職員の感想は以下の通りである。

写真 1　会議の様子

生活科や総合について、今までは、計画通りにやればよいと考えていた。この会議を通して、幼小の授業をやってみようとか、前の計画と変えてやってみようとか、アイデアを出し合うことが大切なことに気付いた。
自分たちが取り組んできたことを価値付けることができたことで見通しをもつことができた。
地域の教育資源の活用について。よいと思っても、なかなか一歩を踏み出せない。それを改善していかなければならない。指導観を見直すことができた。

計画通りにこなすことから新しい活動のアイデアを出すことの大切さに気付いた職員や、活動の価値を知ることで見通しがもてた職員、地域連携に対する指導観の改善につなげた職員等、目的と活動をつないで見直すことの価値に気付くことができた職員の姿が見られた。

(3) 学校運営協議会での検討

学校評価会議で出された意見を、学校運営協議会で検討した。以下はその記録の一部抜粋である。

学校：5 年生の活動がいろいろありすぎて、ねらいとつながらない。鼓笛や米作りなど、どれも伝統があり変えにくい。どれも中途半端な活動になってしまう。
委員：活動がありすぎるのはよく分かる。本物の意識を育てることが必要。来年度は、再来年度改善することを地域に啓発する。そして、再来年度改善する。
学校：6 年生の職場体験が中学校と同じ活動になっている。
委員：受け入れ側も、小学生ということや時間に限りがあるので、受け入れにくいところもある。
学校：発達段階を考えると、職場体験よりも職場調べでよいのではないか。
委員：無理に体験をさせなくても良い。それよりも、働く人の思いや考え方を知ることが大切。
学校：幼稚園体験を柱にしてはどうか。相手に応じたかかわり方を養うことができる。思いやりの心とか。
委員：それも一つの方法だと思う。

5、6 年生の総合について意見交換をした。これまでの学校運営協議会と違い、具体的な話し合いができた。来年度以降も計画的に位置付けることで、学校と地域とで理念を共有しながら子どもを育てる教育活動の評価の仕組みが構築できる。

3　学校と地域が理念を共有した全校ふるさと遠足（平成 29 年度 4 月～6 月実践）

(1) 学校と地域が共通の観点で子どもを育てる子どもの成長記録カード

平成 29 年度に学校運営協議会を開催した。学校全職員と地域代表とで、目指す子どもの姿の共有を図

ることが目的である。結論として、子どもに、自己肯定感や自己有用感を養い、自分に自信をもって「チャレンジする気持ち」や「自分の手で活動をつくる」という姿につなげたいということになった。

この共有した目指す子どもの姿に向けて、職員と地域ボランティアが同じ観点で関わる仕組みが必要である。そこで、地域と連携した活動の柱の一つである全校ふるさと遠足において、図2の「子どもの成長記録カード」を作成し、子どもの成長を図る取組を行った。

尚、この「子どもの成長記録カード」の目的と活用方法については、全校ふるさと遠足事前説明会で地域ボランティアに説明した。

全校ふるさと遠足　子どもの成長記録カード

・子どもは，大人からほめてもらうと，自分に自信をもちます。がんばっている様子やリーダーシップを発揮している様子が見られましたら，「○○できてすごいね，えらいね」とほめてください。
・ボランティアさんの昔の話や，コースにまつわる思い出とかを話しながら歩いていただけるとありがたいです。

主観でかまいませんので，以下のような姿の様子について○を付けてください。（　）は，主に見る場所です。

遠足で目指す子どもの姿	活動記録メモ（○を付けてください）
草木や生き物について知っていることを話しながら楽しむ姿（城山から大平公園）	1　見られた　2　まあまあ見られた 3　あまり見られなかった　4　見られなかった
自分のかんばったことが言える姿（お昼休み・到着後）	1　見られた　2　まあまあ見られた 3　あまり見られなかった　4　見られなかった
グループ内で仲良く歩いたり，遊んだりする姿（城山から大平公園）	1　見られた　2　まあまあ見られた 3　あまり見られなかった　4　見られなかった
ボランティアの方とあいさつしたり，会話したりする姿（遠足の行き帰り）	1　見られた　2　まあまあ見られた 3　あまり見られなかった　4　見られなかった
仲間同士で励ましたり，手伝ったりする姿。（遠足の行き帰り）	1　見られた　2　まあまあ見られた 3　あまり見られなかった　4　見られなかった
山登りや昼休みなどグループの仲間に指示を出す4，5，6年生の姿	1　見られた　2　まあまあ見られた 3　あまり見られなかった　4　見られなかった

その他（運営面で気付いたこと）

図2　子どもの成長記録カード

(2) 子どもの成長を見取る評価方法による活動の実際

昼食休憩の時に記録していた地域ボランティアに様子を尋ねた。すると、「草花や生き物について質問してくる子が数名いました。」「5、6年生が下学年の荷物を持ったり、手をつないだりしていたよ。」と観点に沿った子どもの姿を述べた。「子どもの成長記録カード」の観点に沿って子どもの成長を評価している姿である。

学校到着後、子どもたちと地域ボランティアとで振り返りを行った。私が観察したグループでは、子どもたちから、荷物をもってくれてうれしかったことや、お昼に遊んで楽しかったこと、森の中を歩いて楽しかったことなどの感想が発表された。最後に、地域ボランティアが話をした。このグループのボランティアは、地域の区長であった。見附小に孫がいるというわけではない。見附まちなか東コミュニティの誘いを受けて参加したとのことであった。上学年のリーダーシップや下学年の粘り強さ、グループ内の励まし合いに感動したと子どもたちに話をした。子どもたち、高学年はその話を聞いて喜んでいた。

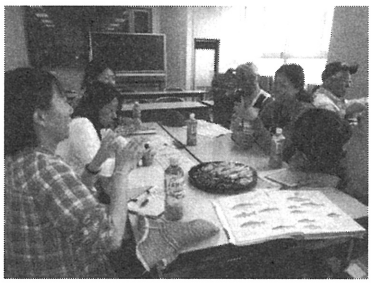


写真2　子どもの成長を語る会

その後、子どもの成長を語る会を行った（写真2）。到着時刻差が30分程度あったので、到着したグループの地域ボランティアから会議室で行った。ファシリテーション形式で行い、ライターは、私と学校運営協議会委員とで行った。地域ボランティアのほぼ全員が参加し、カードの観点に沿って子どもたちの成長の様子について語り出した（図3）。

ライターが追いつかないくらい、子どもの成長の具体についての意見が出た。終わりの合図を出したのだが、止まらなかった。学校運営協議会委員が、「先生、みんな話したいのですよ。だから話が止まらないでしょ。とてもよい光景ですよね。」と述べた。

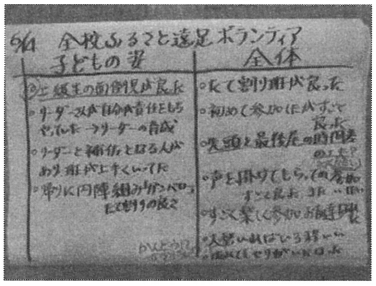
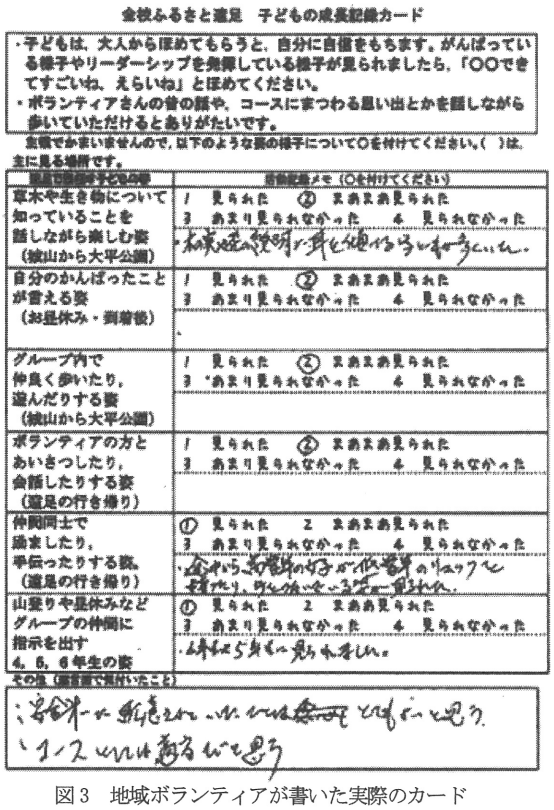


写真3　記録したシート

この地域ボランティアの声を学級担任に届けることで、後日、子どもたちを褒めたり、自信を持たせたりする材料になると考え、記録したシートを職員室に掲示した（写真3）。

この活動を通して明らかになったことは、「子どもの成長記録カード」により、子どもの成長を評価する観点を示すことで、地域ボランティアも子どもの成長を価値付けたり、働き掛けたりすることができるということである。

また、それに伴って、子どもと地域ボランティアとのかかわりが深まっていったことも成果の一つである。このような異年齢による交流の姿は、地域課題である世代間交流の解決方法の一つになる。地域ボランティアも子どもとのかかわりに喜びを感じる姿も見られた。この姿が、学校と地域の WIN－WIN の活動の姿であると考える。


全校ふるさと遠足　子どもの成長記録カード

・子どもは、大人からほめてもらうと、自分に自信をもちます。がんばっている様子やリーダーシップを発揮している様子が見られましたら、「○○できてすごいね、えらいね」とほめてください。
・ボランティアさんの昔の話や、コースにまつわる思い出とかを話しながら歩いていただけるとありがたいです。

気楽でかまいませんので、以下のような面の様子について○を付けてください。（　）は、主に見る場所です。

観察対象様子と内容	活動記録メモ（○を付けてください）
草木や生き物について知っていることを話しながら楽しむ姿（城山から大平公園）	1 見られた ② まあまあ見られた 3 あまり見られなかった 4 見られなかった ・[illegible]
自分のがんばったことが言える姿（お昼休み・到着後）	1 見られた ② まあまあ見られた 3 あまり見られなかった 4 見られなかった
グループ内で仲良く歩いたり，遊んだりする姿（城山から大平公園）	1 見られた ② まあまあ見られた 3 あまり見られなかった 4 見られなかった
ボランティアの方とあいさつしたり，会話したりする姿（遠足の行き帰り）	1 見られた ② まあまあ見られた 3 あまり見られなかった 4 見られなかった
仲間同士で励ましたり，手伝ったりする姿。（遠足の行き帰り）	① 見られた 2 まあまあ見られた 3 あまり見られなかった 4 見られなかった ・[illegible]
山登りや昼休みなどグループの仲間に指示を出す4，5，6年生の姿	① 見られた 2 まあまあ見られた 3 あまり見られなかった 4 見られなかった ・[illegible]

その他（自由書で気付いたこと）
・[illegible]

図3　地域ボランティアが書いた実際のカード

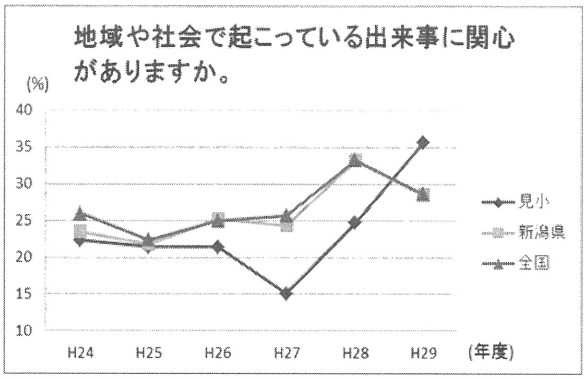
4　地域連携の教育的効果

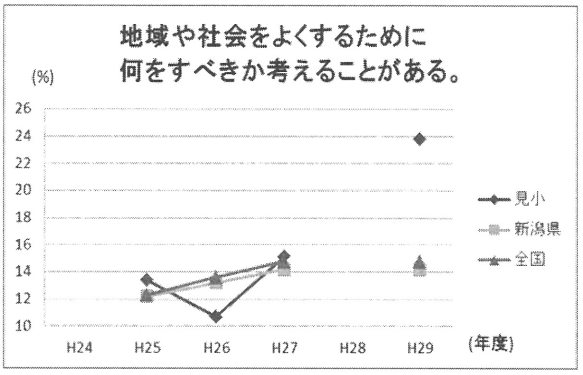
見附小学校は、平成 26 年度から、グランドデザインの柱を地域連携強化とし、コミュニティスクールを活用した活動に取り組んできた。その教育的効果について、平成 24 年度から平成 29 年度の全国学力・学習状況調査の質問紙調査を基に述べる。以下のグラフは、4 段階評価（当てはまる、どちらかというと当てはまる、どちらかというと当てはまらない、当てはまらない）のうち、「当てはまる」の割合を表したグラフである。

地域や社会への参画意識や、地域や社会で起きている出来事への関心の度合いについて述べる。

平成 29 年度の 6 年生は、平成 26 年度から 4 年間、地域連携強化のもとに教育活動を展開してきた学年である。日教弘教育賞最優秀賞の実践をスタートさせた学年でもある。

「地域や社会をよくするために何をすべきか考えることがある。」では、平成 26 年度から数値が向上し、平成 29 年度では全国平均や新潟県平均を大きく上回っている（平成 28 年度の調査にこの項目はない）。





「地域や社会で起こっている出来事に関心がありますか。」では、平成 29 年度の 6 年生の数値が、全国平均と新潟県平均を上回っている。これも、前述と同様に、地域とのかかわりを深めてきた成果と考える。

共通していることは、活動の目標やねらい、すなわち理念を学校と地域が共有して活動を進めてきたということである。以上のことから、理念を共有した地域連携は、地域への参画意識を高める方法としての可能性があると考える。

5　おわりに

学校と地域は、子どもに地域の未来を託すのである。学校職員と地域住民が共に子どもを育てる意識に改善するためには、子どもへのかかわりにやりがいをもつことが大切である。本研究が、その一助となり、子どもの幸せな未来のためになれば幸いである。

参考・引用文献

・新谷さゆり、『～魅力あるコミュニティスクールのあり方～地域と学校が協働で取り組む将来の担い手育て～』、新潟県コミュニティスクール研修会資料、2016
・文部科学省、『コミュニティスクール 2016』
・文部科学省、『コミュニティスクール 2017』